

『門』の御米の人物像を読み解く

——「拒否」「からかい」「微笑」の身体表現を通して——

台湾・淡江大学外国語文学院 日本語学科

曾 秋 桂

一、始めに

本論は御米の人物像を作品に即して御米の身体表現から解明しようとする試みである。以前の「門」研究では、研究課題の一つとして、御米の人物像にはつきりと焦点が置かれていた。御米の人物像に対する評価は研究者の性別によつてはつきりと分かれている。男性研究者の間では、御米は人気のある人物である^①。その一方で、女性研究者の間では、それほど評価されていない^②。しかし、石原千秋の「ダブル・バインド」に代表される、「門」の夫婦関係に関する見解が複雑化にするにつれ、御米は、佐藤勝の「視点の脱落」^④、中山和子の「デイス・コミュニケーション」な夫婦関係での「空白」^⑤、浅野洋の「正体不明」^⑥というような、性格のはつきりしない人物であるという否定的見方が主流になってきた。しかし、

夫婦関係を忠実に読むと、宗助夫婦は、確かに今まで指摘されてきた「ダブル・バインド」「デイス・コミュニケーション」というような否定的性格付けで捉えられる崩壊要因をばらんでいるが、同時に夫婦のきしみを乗り越えている関係であり^⑦、そこには修復、回復の姿も読み取ることができる。そうした点から、御米の宗助に対する応対場面を見直してみると、そうした夫婦関係のきしみと修復の反復を端的に表す、宗助と御米の会話の場面には、御米の宗助に対する表情や応答の身体表現という具体的手掛かりがあり、それを把握することによって、御米の人物像を捉えることができるのである。以下、そうした場面での御米の身体表現に即して、御米の人物像を読み解いていきたい。

二、身体表現から見た御米の人物像

宗助夫婦の間で見られる、御米の身体表現を以下で取り上げて、御米の人物像を捉えてみる。ここでは、表情と身体の動きの全てを含めて、身体表現と呼ぶことにするが、本論ではその中で、二人の応答の場面だけを取り上げた。それは夫婦間での応答が夫婦関係を最も端的に示している場面だからである。応答の場面での御米の身体表現を分類してみると、「拒否」、「からかい」、「微笑」の三つに分けて見ることができさる。

1. 拒否

作品中、御米は宗助とのやり取りの中で、しばしば「拒否」を意味するような動きをしている。

まず、第三章では、宗助の弟を交えた食事の場面で、宗助と応対している御米は、次のように「拒否」を示している。なお、傍線は全て論者による。

(小六)「兎に角満洲だの、哈爾賓だのつて物騒な所です
ね。僕は何か危険な様な心持がしてならない」と云つた。
(宗助)「夫や、色んな人が落ち合つてるからね」

此時御米は妙な顔をして、斯う答へた夫の顔を見た。

宗助もそれに気が付いたらしく、

「さあ、もう御膳を下けたら好からう」と細君を促がして、先刻の達磨を又疊の上から取つて、人指指の先へ載せながら、

「どうも、妙だよ。よく斯う調子好く出来るものだと思つてね」と云つてゐた。(二三の二・括弧内は会話主)

小六が触れた「満洲」は、宗助夫婦の過ちの被害を受けた安井が行つた所である。それで、「夫や、色んな人が落ち合つてるからね」と言う宗助の言葉(8)を、安井の存在を仄めかすかのように受け取つた御米は、「妙な顔をして、斯う答へた夫の顔を見た」。御米が「妙な顔」をして、宗助を見たことは、まさしく宗助に「満洲」の話題にこれ以上触れてほしくないという意味を表しているであらう。その意味に気づいたらしく、宗助は「さあ、もう御膳を下けたら好からう」というように話題を変えた。

次は、上の場面につき、宗助夫婦が会話している中で、御米の「拒否」が再び見られる。

(御米)「貴方があんな玩具を買つて来て、面白さうに指の先へ乗せて入らつしやるからよ。子供もない癖に」
宗助は意にも留めない様に、軽く「さうか」と云つた

が、後から緩くり、

「是でも元は子供が有つたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味はつてゐる風に付け足して、生温い眼を挙げて細君を見た。御米はびたりと黙つて仕舞つた。

「あなた御菓子食べなくつて」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「え、食べます」と云ふ小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立つて行つた。(二三の三・括弧内は会話主)

引用のように、「是でも元は子供が有つたんだがね」と言つた後の宗助は、「生温い眼を挙げて細君を見た」。それに対して、御米は「びたりと黙つて仕舞」つた。だが、その御米の反応に宗助は気づかなかつた。それから、御米は小六に向けて話を続けたが、小六からの返事を聞き流して、現場を去つて行つた。この一連の御米の動作も宗助の話題をそこで断ち切つており、二人の話題のやりとりは切れている。これも話題への「拒否」と言える。こうした御米の態度は宗助夫婦の間で、叔父と財産をめぐる、話を交わしている場面でも同じである。

(宗助)「御米、久しく放つて置いたが、又東京へ掛け合つて見様かな」と云ひ出した。御米は無論逆ひはしな

つた。たゞ下を向いて、

「駄目よ。だつて、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細さうに答へた。

「向ふぢや此方に信用がないかも知れないが、此方ぢや又向ふに信用がないんだ」と宗助は威張つて云ひ出したが、御米の俯目になつてゐる様子を見ると、急に勇気が挫ける風に見えた。(四の四・括弧内は会話主)

叔父との財産問題をめぐつて、夫婦が会話を交わしているこの場面で、御米の様子は、「下を向く」、「俯目になつてゐる」の二通りで表されている。御米の様子を宗助が見ると、「急に勇気が挫ける風に見える」と描写されている。御米の「下を向く」、「俯目になつてゐる」動きは、宗助に明らかに逆らう意味ではないとしても、少なくとも宗助を支持する態度とは見えない。その「逆らう」までには至らない間接的拒否というような微妙な「拒否」を御米はここで示している。これと同じような微妙な「拒否」を佐伯叔父と叔母が御米に彼らの家へ遊びに来るように勧めた場面で、御米は示している。

(佐伯叔父と叔母から)「何うです、些と御出掛けなすつちや」など、云はれると、たゞ

「難有う」と頭を下げる丈で、遂ぞ出掛けた試はなかつた。流石の宗助さへ一度は、

「叔父さんの所へ一度行つて見ちや、何うだい」と勧めた事があるが、

「でも」と変な顔をするので、宗助は夫限決して其事を云ひ出さなかつた。(四の七・括弧内は会話主)

遊びに来ることを勧める叔父夫婦に対し、御米の態度は、「難有う」と頭を下げる丈で、遂ぞ出掛けた試はなかつたと描かれている。御米が一度も行かなかつた結果から見れば、ここでの「難有う」とは、いわば「断り」と同じである。ここでは、下を向いたり、頭を下げたりする御米の身体表現は、他者に対して、控えめに「断り」の意味を表す動作である。

さらに宗助に勧められると、御米は「変な顔をするので、宗助は夫限決して其事を云ひ出さなかつた」(四)。ここで見られる御米の「変な顔」とは、より強い拒否の意味を表すものだと理解される。そして、宗助はその意味を理解し、これ以上御米の気持ちに逆らうような話をしなくなつた。このように、御米の意思の表し方には、頭を下げて「難有う」を言うような間接的な場合から、「変な顔」をするような明示的な場合まで、度合の強弱は見られるが、いずれも「拒否」を表している点では同じである。

最後に、御米の拒否は、子供ができたのではないかという話題を出した宗助との会話の場合に見られる。

(宗助)「御米、御前子供が出来たんぢやないか」と笑ひながら云つた。御米は返事もせずに俯向いてしきりに夫の脊広の埃を払つた。刷毛の音が已んでも中々六畳から出て来ないので、又行つて見ると、薄暗い部屋の中で、御米はたつた一人寒さうに、鏡台の前に坐つてゐた。はいと云つて立つたが、其声が泣いた後の声の様であつた。

(一六の一・括弧内は会話主)

引用のように、「御米、御前子供が出来たんぢやないか」と笑いながら言つた宗助に対して、御米は、「返事もせずに俯向いてしきりに夫の背広の埃を払つた」。御米の「俯向いて」いる様子は、先にもあつた「下を向いたり、頭を下げる」する御米の身体表現と同質なものである。

そして、宗助の質問に対する返事を避けて六畳の部屋に入つた御米は、様子を見に来た宗助に対して、「はい」と答えたが、「其声が泣いた後の声の様であつた」とあるように、御米は泣いていたと見られる。この場合も明らかに「子供」の話を避ける御米の姿が浮かんでくる。

以上、まず、大事な点は、いずれの場合も、御米は表情や

身体の動きを通して、宗助に自分の「拒否」の意思を伝えて
いることである。御米のこうした感情の動きと相手への意思
表示は、非常にはつきりしている。

次に、注目すべきことは、御米が拒否した話題に共通点があるという点である。話題は、安井、子供、叔父夫婦に限られてはいるが、これらのうち、安井と子供の話題は、二人の夫婦関係を崩しかねず、しかも、御米の努力だけではその危険を回避し得ない要因であると言える。また、叔父夫婦と会うことを「拒否」していることも、自分達の過去に触れられる危険が高く、その意味で、叔父夫婦と深く関わりたくないために、進んで会おうとはしないという動機を見ることは可能であろう。こうした話題を避けようとする御米に、自分達夫婦を不可避的に脅かしかねない対象を避けようとする明確な判断があるのは当然であろう。

こうした御米の「拒否」は、御米が自分の判断と意志に従って行動している結果であると思われる。まず、「拒否」からは、宗助との夫婦関係で対等に、しかも自己の判断で主体的に動いている女性であることが明らかに。また、宗助に示した御米の「拒否」は、伝わる場合もあるが、ただの会話の打ち切りに終わる場合もあり、その点で夫婦の「ダブル・バインド」、「デイス・コミュニケーション」を示しているが、見落としてはならないのは、御米がこうした意思表示

をとおして、夫婦関係を脅かす危険を遠ざけていることである。宗助に執着があり、夫婦関係では、かなり二人の間を危うくさせる子供の話題が出されたとき、御米は二回「拒否」を示している。そこで、夫婦はきしむと同時に、御米の「拒否」により不可避的な問題に直面する危険を回避し、次の修復の機会を得ることができるのである。「門」で繰り返している御米の「拒否」は、夫婦関係においても、御米の性格に関しても、見落としてはならない表徴である。

2. 「からかい」

次に、御米と宗助のやり取りの場面で目立つのは、宗助をからかう御米の動きである。第三章では、「どうかして、朝湯に丈は行きたいね」と言った宗助に対して、「其癖朝湯に行ける日は、屹度寐坊なさるのね」と細君は調戲ふ様な口調であつた」と描写されている。ここに、「調戲ふ様な口調」とあるように、御米は、宗助をからかった言い方をしている。また、ここで使われている会話中の「其癖」にも、相手をかからかう調子を読み取ることができる。「からかい」の身体表現を読み取る手掛かりは、こうした発言に伴う「調戲ふ様な口調」、「其癖」と類似した表現に見ることができる。こうした表現も身体表現に含めて、似た例を以下に示す。例の傍線

は論者による。

①「貴方大変だつて云ふ癖に、些とも大変らしい声ぢやなくつてよ」と御米が後から冗談半分にわざ／＼注意した位である。

(三の二)

②(御米)「貴方」があんな玩具を買つて来て、面白さうに指の先へ乗せて入らつしやるからよ。子供もない癖に」(中略)

「是でも元は子供が有つたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味はつてある風に付け足して、生温い眼を挙げて細君を見た。

(三の三・括弧内は会話主)

③「妙ね、あれ程気にして入らしつたのに」と御米がうす笑をした。「だつて、落ち付いて、そんな事を云ひ出す暇がないんだもの」と宗助が弁解した。

(四の六)

先に見た第三章の例と同じ「からかい」は、例①「貴方大変だつて云ふ癖に」、「冗談半分に」、例②「子供もない癖に」に見られる。例③の「うす笑い」も、「からかい」に伴つて見られる御米の身体表現である。例③の会話中の「のには」、「癖に」と、やり取りの上では同じ役割をしている。二人のやり取りの様子から、これらも御米が宗助をからかう表現と

して認められる。

また、作品中、御米は、宗助に向かって二回「冗談」を言ったことがある。

④(宗助)「又、ヒステリーが始まつたね。好いぢやないか小六なんぞが、何う思つたつて、己さへ付いてれば」(御米)「論語にさう書いてあつて」

御米は斯んな時に、斯ういふ冗談を云ふ女であつた。宗助は

「うん、書いてある」と答へた。夫で二人の会話が仕舞になつた。

(六の二・括弧内は会話主)

⑤(御米)「まあ御金持ね。私も一所に連れてつて頂戴」と云つた。宗助は愛すべき細君のこの冗談を味ふ余裕を有たなかつた。真面目な顔をして、

「そんな贅沢な所へ行くんぢやないよ。(後略)」と弁解した。

(十八の一・括弧内は会話主)

例④と例⑤では、「御米は斯んな時に、斯ういふ冗談を云ふ女であつた」及び「宗助は愛すべき細君のこの冗談を味ふ余裕を有たなかつた」と説明があるが、これらも、「からかい」という行為では同じ働きを示していると考えられるので、この発言も「からかい」の身体表現に含めて見ることに

する。

こうした御米の「からかい」、「冗談」からは、どんな夫婦関係や性格が読み取れるであろうか。先に見た、御米の「からかい」に、宗助が言葉で返した場合は、四回のうち、二回ある。引用②の「子供もない癖に」と言った御米の言葉に対して、宗助は、「是でも元は子供が有つたんだがね」と返事をした。「是でも」で始めた返事の如く、御米の「からかい」を真剣に否定した。また、引用③では、「だつて、落ち付いて、そんな事を云ひ出す暇がないんだもの」と宗助が弁解した」とあるように、明らかに宗助は御米の「からかい」に対して自己弁護をしている。このように、御米の「からかい」に対して、宗助はそれを冗談にせず、真剣に受け止めて反応を示していると言えよう。また、「冗談」の場合も、御米の「冗談」に、例④では、宗助が「うん、書いてある」と答えた後、会話が続かなくなった。例⑤でも、宗助は、「真面目な顔をして、『そんな贅沢な所へ行くんぢやないよ。(後略)』と弁解した」。ここでも「冗談」を言う御米と、「弁解」する宗助という関係が見られる。御米から言われる「からかい」、「冗談」を、宗助は、受け流したり、軽口でやり返したりする素直な夫婦のやりとりとして、受け取れなかつたのである。

こうしたところからは、確かに夫婦のすれ違いや「ディ

ス・コミュニケーション」を読み取ることができる。だが、「今日迄六年程の長い月日をまだ半日も気不味く暮した事はなかつた。言逆に顔を赤らめ合つた試は猶なかつた」(十四の一) 宗助夫婦にとって、御米が宗助に言った「からかい」や「冗談」は、別に夫婦間の感情を害するような結果を招いたわけではないし、御米の孤立を深めさせているわけでもない。この、すれ違いや「ディス・コミュニケーション」は、結果として、以前と変わらない二人の関係の維持に繋がっているのである。

そして、結婚前、宗助に「普通の人間を静にして言葉寡なに切り詰めた丈に見えた」(十四の七) 御米と比べてみると、姿勢が積極的になつたと言え、同一人物だとは思われないほど大きく変化している。結婚後、夫の宗助をからかつたり、冗談を言つたりするようになった御米の変化は、ひっそりとした二人の夫婦生活を活発にさせるための、御米の主體的な宗助への関心の表れであり、言葉少なになりがちな夫婦の関わりを修復させる試みだとも言えるし、そこで使つたテクニクとも考えられる。

先の「拒否」と同様に、ここでも御米は、宗助に対してはつきり自分の感情の動きを伝え、積極的に関係の円滑化、あるいは修復を目指している。例④のように、「小六」の話題をうち切るために、あえて、「冗談にもならない冗談を言つて

言葉の接ぎ穂を断ち、夫婦関係のきしみを回避したと思われる例もある。これは、「デイス・コミュニケーション」になることを逆手にとっているとも言えるのである。ここからは、二人なりの安定を取り戻そうとするコミュニケーションの取り方、付き合い方の機微を読み取ることができると言えよう。

3. 「微笑」

最後に、今までよく取り上げられてきた御米の「微笑」を見よう。御米の「微笑」は、早くから岡崎義恵によって指摘されてきた。⁽¹⁰⁾そして、その説の延長で、内田道雄も御米の微笑を「門」の世界の基調としている。⁽¹¹⁾このように、先行研究では、我慢と忍耐を一人で背負って少しも厭な顔を見せない「聖女のほほえみ」だと御米の「微笑」は位置づけられている。⁽¹²⁾

一方、それに対して、この二十年あまりの間に、それを否定する論が出されるようになった。石原千秋は、御米の「微笑」を六年間の結婚生活から作り出された表情の一つであり、その殆どの「微笑」は「微笑」に置き換えることができるとしている。⁽¹³⁾さらに、中山和子は御米の「微笑」は「デイス・コミュニケーションと抑圧の身体表現」であり、「仮面」であると指摘している。⁽¹⁴⁾このように、御米の「微笑」に

ついては、肯定的評価とそれへの反論との両論が並行している。しかし、いずれの評価を取るにしても、「微笑」は、御米の人物像を知る上で、無視できない大事なポイントであることは確かである。以下、「門」に見られる御米の「微笑」を整理して、表(一)に示す。

表(一)に示したように、御米が見せる「微笑」の対象は、夫の宗助一人に限られている。また、「例の如く」、「何時もの通り」、「大抵苦しい場合でも」と形容されていることから、「微笑」は、日常生活で御米が夫である宗助によく見せる表情の一つだということが分かる。

さらに、「微笑」の表記に注目すると、「ほ、ゑむ」と「びせう」の二通りのルビが付けられている。「ほ、ゑむ」は、第六章の④と⑤に限られ、それ以外は、「びせう」と読まれている。「ほ、ゑむ」は、「屏風売却」の際、宗助夫婦が協力し、道具屋に向かって「屏風」の値段を交渉した時に使われている。このことから第六章の④と⑤の二例は、他者に向かった時、夫婦の一体感を表すために、「ほ、ゑむ」のルビで使われたと考えられる。ちなみに、「夫婦は日の前に笑み、月の前に考へて、静かな年を送り迎へた」(十五)とあるように、宗助夫婦の一体感を表す場合、「笑」(ゑむ)の表現も見られる。

それに対して、「びせう」は、宗助一人に見せる御米の表

情である。その「びせう」は、普段の表情と、宗助と応答する際に見られる表情の二種類に分けて見ることができるといえる。

ア. 宗助に応答する場面に見られる表情として

まず、宗助に応答する場面に見られる「微笑」を見よう。前後の場面を見ると、「微笑」の表れ方には、二つの場合があることが分かる。

A. 無言の表情

一つは無言の表情で、言葉を伴わないで、ただ、御米が「微笑」する場合である。例⑨と例⑩の二例がある。

例⑨は、宗助夫婦が「洋燈を点けて丁度晩食を始めた所」(十六の二)、坂井から正月以来自宅への誘いが二度目に来た場面で、食事する間際に来た誘いに対して、御米は「微笑」して宗助を見た。すると、宗助は、「少し迷惑さうな眉をした」。行くことを躊躇った宗助は、さらに詳しく事情を聞いた後、行くことに決めた。ところが、この誘いを受け入れたことによつて、坂井の家で、安井らしき人のことを聞かされる結果になり、不安になった宗助は参禅に赴いたのである。

ここで見られる御米の無言の「微笑」は、恰も困惑して「どうするか」というように、宗助に意見を求める御米の表情だと言つてもよからう。

例⑩は、宗助が参禅に行くことを御米に持ち出した場面

表(一) 御米の微笑

| 章 | 内容 | 具体的描写 | 対象 |
|----|----|--|--------------|
| 一 | | ①「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。 | 宗助 |
| 四 | | ②「小六さんが怒つてよ。可くつて」と御米はわざと念を押して置いて微笑した。 | 宗助 |
| | | ③御米は気の毒さうな顔をして、「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、 <u>例の如く</u> 微笑した。 | 宗助 |
| 六★ | | ④過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、不図此知識を結び付けて考へ得た彼女は一寸微笑んだ。 ⑤夫婦は顔を見合して微笑んだ。 | 宗助との会話 宗助 |
| 十一 | | ⑥たゞ口の先で、成るべく安静にしてみなくては不可ないと云ふ矛盾した助言は与へた。御米は微笑して、「大丈夫よ」と云つた。 | 宗助 |
| | | ⑦「少しは可いだらう」と聞いた。「え、余つ程案になつたわ」と御米は <u>何時もの通り</u> 微笑を洩らした。 | 宗助 |
| | | ⑧御米は <u>大抵苦しい場合</u> でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかつた。 | 宗助 |
| 十六 | | ⑨そこへ清が坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑した。宗助は茶碗を置いて、「まだ何か催ふしがあるのかい」と少し迷惑さうな眉をした。 | 宗助 |
| 十七 | | ⑩御米が <u>何時もの通り</u> 微笑して枕元に曲んでゐた。 | 宗助 |
| 十八 | | ⑪地味な宗助とハイカラな鎌倉とは殆んど縁の遠いものであつた。突然二つのものを結び付けるのは滑稽であつた。御米も微笑を禁じ得なかつた。 | 宗助 |

説明1：表(一)は論者が御米の「微笑」を整理したものである。

説明2：★が付いている第六章の二例は、「ほゝゑむ」と読まれている。

ある。「地味な宗助とハイカラな鎌倉とは殆んど縁の遠いものであつた。突然二つのものを結び付けるのは滑稽であつた。御米も微笑を禁じ得なかつた」(十八の一)とあるように、「滑稽さ」のために、御米は、「微笑」をしてしまったのである。ここでの「微笑」は、宗助との対話からの弾みによつて、自然に浮かんだ御米の表情だと思われる。

この二例の無言の「微笑」は、困惑したり、滑稽に思つたりする時に、自然に浮かんだものである。また、「例の如く」や「何時もの通り」で書かれていないことを見ると、偶々起こつた一回限りの事件に出会つた御米の顔に浮かんだ自然の表情だとも言える。

B. 返事を伴つた表情

もう一つは、返事を伴つた表情で、話をしながら一緒に表わす「微笑」である。例①②③⑥⑦の五例がある。

まず、宗助にはつきりと意見を言つた時に表した例①②③の「微笑」を見よう。

例①では、「一寸散歩に行つて来るよ」と言つた宗助に対して、「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた」と描かれている。それは、もう少し前の所で、宗助夫婦間で交わされた次の会話と呼応している。

しばらくすると今度は細君の方から、「ちつと散歩で

も為て入らつしやい」と云つた。然し其時は宗助が唯うんと云ふ生返事を返した丈であつた。(一一の一)

「ちつと散歩でも為て入らつしやい」と言つた御米に対して、生返事をしただけの宗助は、その後、御米に言われた通り、「一寸散歩に行つて来るよ」と言つて、当てもなく東京の街へ出掛けた。こうして見ると、宗助は、結果的に御米の指示に従つて行動を取つたと言えよう。この時に見られる御米の「微笑」は、主導的位置に立つて、宗助に何かを勧めた時に表した御米の表情である。

それと同じような「微笑」は、例②③にも見られる。

②(宗助)「さうさ。まあ其内何とか云つて来るだらう。夫迄打遣つて置かうよ」

(御米)「小六さんが怒つてよ。可くつて」と御米はわざと念を押して置いて微笑した。

(四の一・括弧内は会話主)
③すぐにも東京へ行きたい様な気がして、実は斯うくだがと、相談半分細君に話して見ると、御米は氣の毒さうな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例の如く微笑した。其時宗助は始めて細君から宣

告を受けた人の様に、しばらく腕組をして考へたが、
何う工夫したつて、抜ける事の出来ない様な位地と事
情の下に束縛されてゐたので、つい夫成になつて仕舞
つた。
(四の四)

例②は、佐伯叔母さんと、弟の小六に対する資金援助の交
渉の件について、「夫迄打遣つて置かうよ」と言つた宗助に
対して、「小六さんが怒つてよ。可くつて」と御米は注意を
した。その後、会話が途切れたが、「中一日置いて、宗助は
漸く佐伯からの返事を小六に知らせてやつた」(四)とある
ように、結局、最後には御米が注意した通りに、宗助は実行
したのである。そして、そのきつかけをつくつた御米の様子
は、「わざと念を押し置いて微笑した」と書かれている。
ここでも、御米は気が進まない宗助に一定の方向を勧める形
になつてゐる。

例③も東京行き相談を持ち出した夫の宗助に対して、御
米は、「でも行けないんだから、仕方がないわね」と返事し
た。それを聞いた宗助は、「細君から宣告を受けた人の様に」
暫く呆然とした。そして、「つい夫成になつて仕舞つた」。こ
こでも、宗助は、御米の言つた意見を受け入れたと考えられ
る。宗助の持ち出した相談に返事した御米の様子は、「気の
毒さうな顔をして」、「例の如く微笑した」と描写されてゐる。

以上の三例では、御米が「微笑」を見せた後、大抵、宗助
との会話がそれで打ち切られ、宗助が、結局は御米の言う通
りの行動をした結果になつてゐるといふ共通点を見出すこと
ができる。これらの場合、御米は宗助へ働きかけるために、
「微笑」している。これらでは、「微笑」は相手の意に沿わな
い意見を出した時に生じ、宗助の気難しい雰囲気や和やかに
させる働きを持つてゐると言える。

次に、働きかけという点で共通してゐる、夫の宗助に安心
をさせるために表す、例⑥⑦の「微笑」を見よう。例⑥では、
「たゞ、口の先で、成るべく安静にしてゐなくては不可ない」と
云ふ矛盾した助言は与へた(十一)宗助に対して、御米は
微笑しながら、「大丈夫」と言つて宗助を安心させた。例⑦
では、「少しは可いだらう」(十一)と御米の容態を心配して
聞いた宗助に対して、「え、余つ程楽になつたわ」(十一)と
言つて同じく微笑をした。この二例の「微笑」からは、健康
状態を心配してくれる夫を安心させるという御米の意図が窺
われる。

このように、返事を伴つた表情としての「微笑」は、宗助
への働きかけとして表した表情だといふことが分かる。

イ. 普段の表情として

残りの例はどうであらうか。例⑧で、「御米は大抵苦しい

場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかつた」(十一の四)と語り手が説明している。「門」では、まず、語り手によつて、「微笑」は御米の普段の表情だと説明されている。説明ばかりではなく、描写の形で表す「微笑」も見られる。それは、坂井の家で安井らしき人のことを聞いてから不安になつた宗助が帰宅して、御米の寝ている様子を見た場面で、「何時もの通り微笑して枕元に曲んでゐた」(十七の六)と描写されている例⑩である。「門」では、御米の「微笑」を普段の表情として強調していることが分かる。

また、参禅から帰つた宗助を見た御米は、「如何な場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さへ作り得なかつた」(二十二の一)と描かれている。その場面では、「折角保養に行つた軀地先から今帰つて来たばかりの夫に、行かない前より却つて健康が悪くなつたらしいとは、気の毒で露骨に話し悪かつた」(二十二の一)とあり、宗助がいつもと違つたやつれた様子であつたことが分かる。そんな時、御米は「微笑」を見せないのである。これも、逆説的な意味で、御米が宗助に「微笑」を常に向けていたことを表している例だと言へる。

さらに、御米の「微笑」の特質をより明らかにするために、結婚後の宗助に見せる「微笑」以外の、御米の「笑い」を以下で検討する。なお、取り上げた例は、夫婦間での応答場面のものだけである。

①「だつて、近頃の相場なら、捨売にしたつて、あの時叔父の拵らへて呉れた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿々々しいからね」と宗助が云ひ出すと、御米は淋しさうに笑つて、

「又地面？ 何時迄もあの事ばかり考へて入らつしやるのね。だつて、貴方が万事宜しく願ひますと叔父さんに仰しやつたんでせう」と云ふ。(中略)

宗助も叔父の処置に「理ある様にも思はれて、口では、「その積が好くないぢやないか」と答弁する様なもの、、 (四の五)

②ある時御米が、

「貴方あの事を叔父さんに仰やつて」と聞いた。宗助はそれで急に思ひ出した様に、「うん、未だ云はないよ」と答へた。

「妙ね、あれ程気にして入らしたのに」と御米がうす笑をした。

「だつて、落ち付いて、そんな事を云ひ出す暇がないんだもの」と宗助が弁解した。(四の六)

共に第四章に出ているが、用例の傍線の如く、御米は「微笑」とは違つた「笑い」を宗助に見せ、宗助は共に真剣になつて弁解している。それは、「淋しさうに笑」つたり、「うす

「笑」をしたりする御米の表情によって、いつもの「微笑」とは違ったメツセージが宗助に伝わったからだと理解できよう。ここでの、御米が「淋しさうに笑」ったり、「うす笑」をしたりすることには、「拒否」と同じように、宗助の行動を止めようとする意図が読み取れ、そのため宗助は自己弁護をするような反応を示したと思われる。これらも、「微笑」と同じように、宗助の働きかけを行っている。

なお、「門」全体での「笑い」を見ると、御米以外にも、「笑い」の表情をする人物は数多くいる。坂井の主人を始め、坂井家の陽気さを表す場合、「笑い」で表現されている。一方、経済的支援を失い、不安でも不満でもある小六の表情は「苦笑」で表現されている。また、佐伯の叔母が自慢の息子のことに触れる場合も、「笑い」を表している。そして、殆ど登場しない安井でさえも「笑い」を三回見せている。さらに、宗助家の下女の清もよく主人の前で平気で笑っている。このように、「門」に登場している他の人物の「笑い」も、それぞれの性格に即して表現されていると見られる。

以上、考察してきた「微笑」を整理する。「微笑」には、「ほゝゑむ」と「びせう」の二通りのルビが付けられている。「ほゝゑむ」で表す場合は、宗助夫婦の一体感を表す場合に使われている。一方、「びせう」で表す場合は、全て夫の宗助一人に見せる場合に限られている。さらに、「微笑」の使

われ方を見ると、宗助に応答する場面に見られる場合と、御米の普段の表情を表す場合とがある。宗助に応答する場面においては、返事を伴わなかった場合もあれば、返事を伴った場合もある。返事を伴わなかった場合は、一回限りの事件に出会った御米の顔に自然に浮かんだ表情である。それに対して、返事を伴った場合は、夫の宗助に何らかの働きかけをする場合に使われ、気難しい雰囲気や和やかにさせたり、夫を安心させたりするために見せた「微笑」である。いずれも宗助への働きかけを使った「微笑」である。

御米の「微笑」は、宗助だけに見せる、宗助との結婚後初めて見られる表情であり、結婚後の御米がするようになった「夫たる者の顔色を窺う」一面と共通している。その点で、「微笑」は、確かに御米の夫に対する常の表情であり、石原千秋が言った「微笑」や、中山和子が言った「抑圧の身体表現」のような受け身の表情という一面を読み取ることができる。しかし、それにとどまるものではない。見てきたように、より積極的な働きかけを伴って応答場面で使われている場合が全体の約半数であり、明らかに、御米が主体性を持って、二人の関係を維持、修復しようとする表徴と見ることが出来る。先に見たように、御米は「拒否」や「からかい」というはっきりした表情を持って、夫に自分の意思を伝えていく。そして、同じく「微笑」も、御米が夫婦関係を円滑にさ

せるために取った一つの方法であり、意思伝達のテクニク
の一種である。自然に浮かぶものであれば、「御米は如何な
場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さへ作り得なかつた」(二
十二の一)とあるように、御米の「笑」を「作る」とは表現
しないであろう。この「作る」には、いかにも意識的に努力
した痕跡がはっきりと残っているように思われる。御米の
「微笑」は、二人の夫婦生活を円満に営む上で、御米が払っ
た努力の証だと考えられる。

さらに、例①②③のように、御米が宗助の意に添わないこ
とも、あえて自分の判断で勤めているところから見れば、夫
婦関係の消極的な維持にとどまらず、次のステップへの一步
を準備しようとする御米の意志をそこに読むこともできる。
例①では、宗助は東京の街へ出て、例②では「小六」への送
金を受け入れている。これらは、閉ざされたとも言える二人
の關係に、結果としては、今の街の情報や小六という新しい
要素を引き入れ、新しい可能性を求めたことになると言える
であろう。また、例③では、家の売却を頼んでおいた叔父を
訪ねようとする宗助を引き止めている。宗助が血縁者を尋
ね、難しい交渉をすることで過去が蒸し返され、自分達の家
庭を脅かす危険が生まれるのを避けたとも言える。こうした
試みがされることで、二人の關係には少しずつ発展していく
きっかけが生まれるであろう。御米の「微笑」には、そうし

た未来への意志も込められているのである。

三、終わりに

本論では、宗助との応対場面で目立つ「拒否」、「からか
い」、「微笑」の御米の三つの身体表現から、御米像を解明し
てきた。結論は次の通りである。

「拒否」を控えめに表す「下を向く」、「俯目になつてゐる」
から、「拒否」を強烈に表す「妙な顔」、「変な顔」まで、こ
れらの表情には御米の「拒否」が示されている。「拒否」は、
夫婦の危機になりえる話題を避けようとした結果であり、以
降の修復の機会を得るための意思表示である。「拒否」から、
御米が宗助との夫婦關係で対等に、しかも自己の判断で主体
的に動いている女性であることが分かる。

また、「からかい」の場面からは、御米は、夫の宗助をか
らかったり、夫の宗助に冗談を言ったりする一面を持つてい
ることが分かる。これは、ひっそりとした宗助の夫婦生活を
活発にさせるために、使ったテクニクとも考えられるし、
御米の主體的な宗助への関わりだとも言える。もちろん、「か
らかい」、「冗談」は通じるとは言えず、そこに「デイス・コ
ミュニケーション」を読み取ることができ、これらも結
果として、二人の關係の維持に繋がっているのである。それ

は、二人なりの意志疎通の機微を窺わせるものである。

そして、「微笑」は、確かに御米の常の表情であり、自然に浮かぶもので、その点では、石原千秋が言った「微苦笑」や、中山和子が言った「抑圧の身体表現」のような受け身の表情という一面を読み取ることができる。しかし、御米の宗助への応答場面で、その働きの点として、夫に働きかけをした場合、気難しい雰囲気をやかにさせたり、宗助を御米の思うように行動させたりしている点にも注目すべきである。これこそ、御米が主導的に夫婦生活を円満にさせるために使うテクニックである。そして、御米が宗助の意に添わないこともあえて自分の判断で勤めているところから見れば、次のステップへの一步を準備しようとする御米の意志をそこに読むこともできる。

以上、「拒否」、「からかい」、「微笑」の御米の三つの身体表現を通して見ると、御米は、技巧を用い適切に自分の心情や意見を夫の宗助に伝える、はっきりとした喜怒哀楽を持った自主性のある女性だと言える。とりわけ、技巧を用いながら、自分の思う通りに主導している御米の姿を、宗助の夫婦関係に関連させてみると、それは、正しく御米が崩壊要因を内にはらんでいる自分の結婚生活を維持するのに払っている精一杯の努力の表れである。

宗助夫婦が築いた「家」は、未だ形成途上にあり、夫婦の

間に存在している様々なきしみと修復を、御米は努力して乗り越えようとしていることを、論者は述べたことがある。今回示した御米の身体表現は、そうした未だ形成途上にあつて危機を孕んでいる宗助夫婦の関係の中で、御米が可能な限りでしている危機修復の現実的努力の一つであり、二人の「家」の支えだと思えることができよう。つまり、一見すると、「門」は宗助中心の男性の物語に見えるが、その夫婦関係はダイナミックな関係の形成者としての女性・御米によって支えられている。御米は、今まで指摘されてきたように聖女のような包容力を秘めており、そうした御米が宗助と「ダブル・バインド」、「デイス・コミュニケーション」の関係にあるからこそ、逆に、それを越える意志を御米はこうして「家」の主婦として発揮し始めていると言えるかもしれない。

御米の身体表現からは、明らかに新しい御米の人物像が見えてくる。御米は宿命を達観した聖女というだけでなく、受動的に抑圧された被害者というだけでもない。浮かんてくるのは、主体的に自分の家を形成する力を持つ女性の、力内に宿した姿である。その力は、強い行動には出ないが、目立たない身体表現として常に伴侶に働きかけている。夫婦になろうとする途上の物語である「門」において、宗助にいつかその影響が現れてこないとは、誰にも言えないのである。御米は、そうした不可能を可能に変える形勢力・影響力を身

体表現を通して示しているとも言える。御米の身体表現からは、新しい人物像がはっきり焦点を結んで見えてくる。

注

- (1) 吉本隆明と小川国夫の二人とも、「対談―漱石が創った女たち―」(一九八七)『国文学』第三卷六号(筑燈社)頁一〇では、御米を高く評価している。また、杜本武は「門」(一九九二)『漱石作品論集成』第七卷(桜楓社)頁一二三では、「お米はどちらかといえおとなしい女です。女らしいこまやかさをもってしかも賢い女性です」と述べている。
- (2) 赤井恵子は、「鼎談」(一九九二)『漱石作品論集成』第七卷(桜楓社)頁二六九では、『新潮』の一九八九年六月号の三枝和子と佐伯彰一が対談「愛の矛盾が関係のやさしさか」をしたことに触れている。そこで、三枝和子は、「御米が、やっぱり男の人が読んで好ましい、伏し目がちの慎ましやかな女性だから好きではない」と述べている。
- (3) 谷崎潤一郎(「門」を評す)『谷崎潤一郎』第二〇卷一九六八年中央公論社頁九)以来、「門」の宗助夫婦については、二人の間に「理想主義的な夫婦愛」を見る説が主流であった。その後、牧野陽子(「門」のなかの闇)『日本文学研究資料叢書夏目漱石』一九八五年有精堂頁一七二)などが提出した夫婦の不和説がこの二十年來、相次いで提出されている。そして、この二つの対立する読みのどちらも可能とするよう

な、いわゆる中間的な畑有三の説(「門」『漱石作品論集成』第七卷一九九一年桜楓社頁五四―六〇)もそれに伴って生まれた。このように、「門」の宗助夫婦に関する見解は複雑化している。

- (4) 佐藤勝(一九九二)「門」の構造』『漱石作品論集成』第七卷(桜楓社)頁一八一
- (5) 中山和子(一九九四)「門」論―二つの有機体―神話の隠蔽するもの―『国文学解釈と教材の研究』一月臨時増刊号頁二三三―三三九
- (6) 浅野洋(一九九二)「鼎談」『漱石作品論集成』第七卷(桜楓社)頁二七〇
- (7) 曾秋桂(二〇〇二)「夏目漱石の「門」論―他者としての「小六」の意味―」『淡江日本論叢』第十一輯(淡江大学日本研究所・日本語文学系)頁四二―六四
- (8) 「門」(十七)に「或る関係から、安井がたしかに奉天にある事を確め得た」と記されている。
- (9) 御米が冗談を言ったとははっきりと書かれていないが、宗助が返すべき冗談もないとある第十六章での記述を計算に入れると、三回になる。第十六章では、「御米は仕舞に、「何うも済みません。本当に御気の毒さま」と云つて笑ひ出した。宗助は別に返すべき冗談も有たなかつた」とある。
- (10) 岡崎義恵(一九五六)『漱石と微笑』(東京ライフ社)頁二〇―二五
- (11) 内田道雄(一九九二)「門」をめぐって―夏目漱石論(二)―『漱石作品論集成』第七卷(桜楓社)頁一四

(12) 岡崎義恵(一九五〇)『漱石と微笑』(東京ライフ社)頁一〇―一五

(13) 石原千秋(一九九二)『門』論―「家」の不在―『漱石作品論集成』

第七卷(桜楓社)頁三三二―三三三

(14) 中山和子(一九九四)『門』論―「二つの有機体」神話の隠蔽する

もの―『国文学解釈と教材の研究』一月臨時増刊号(學燈社)頁二三三

(15) 例えば、『門』の(九)、(十三)、(二十二)などに多く描かれている。

(16) ①「近頃神経衰弱だね」と真面目に云ふ。小六は苦笑した。(三)小

六↓宗助)

②「若旦那行つて来い」と宗助が小六に云つた。小六は苦笑ひして

立つた。(十六)小六↓宗助)

③若旦那と呼ばれて、苦笑ひする小六の顔を見ると、(十六)小六↓

宗助)

(17) 『門』の(五)に描かれている。

(18) ①「もう斯んな古臭い所には厭きた」と云つた。安井は笑ひながら、

比較のために、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に

聞かした。(十四)安井↓宗助)

②「さう云ふ所に、人間がよく生きてゐられるな」と不思議さうな

顔をして安井に云つた。安井も笑つてゐた。(十四)安井↓宗助)

③「一週に二返は是非都迄買ひ出しに行かなければならない」と

云ひながら安井は笑つた。(十四)安井↓宗助)

(19) 『門』の(三)(十五)に描かれている。

(20) 石原千秋(一九九二)『門』論―「家」の不在―『漱石作品論集

成』第七卷(桜楓社)頁三三二―三三三

(21) それは、第九章の結婚後小六に屏風の売り値を聞かれた時に、御米が返事する前に夫の宗助を見た場面と、第十四章の結婚前、宗助に出身地を聞かれた時に、御米は返事をせず、安井が御米の代わりに返事した場面とを比べると、御米が結婚後、他者に返事する前、夫たる宗助の顔色を確かめるようになったことが明らかになる。

(22) 曾秋桂(二〇〇二)『夏目漱石の「門」論―他者としての「小六」の意味―』淡江日本論叢』第十一輯(淡江大学日本研究所・日本語文学系)頁四二―六四。なお、宗助夫婦の子供の話題については、

曾秋桂(二〇〇二)『門』の宗助夫婦の関係の構図―二つの話題から―』二〇〇二日本研究国際会議論文集』(台湾大学日本語文学系・台湾日語教育学会)の中で述べた。

テキスト

最新版『漱石全集』(一九九四)第六卷(岩波書店)

参考文献

岡崎義恵(一九五〇)『漱石と微笑』東京ライフ社

谷崎潤一郎(一九六八)『谷崎潤一郎』第二〇巻中央公論社

牧野陽子(一九八五)『日本文学研究資料叢書夏目漱石Ⅲ』(有精堂)

吉本隆明・小川国夫(一九八七)「対談―漱石が創つた女たち」『国文学』

第三二巻六号(學燈社)

赤井恵子・浅野洋編（一九九二）『漱石作目論集成』第七卷（桜楓社）

中山和子（一九九四）『門』論——「二つの有機体」神話の隠蔽するもの——

『国文学解釈と教材の研究』一月臨時増刊号（學燈社）

曾秋桂（二〇〇二）『夏目漱石の「門」論——他者としての「小六」の意味——』

『淡江日本論叢』第十一輯（淡江大学日本研究所・日本語文学系）

曾秋桂（二〇〇二）『門』の宗助夫婦の關係の構図——二つの話題から——

『二〇〇二日本研究国際会議論文集』（台湾大学日本語文学系・台湾日語

教育学会）